

芦屋大学論叢 第74号
(令和3年3月22日)抜刷

《研究ノート》

大学男子バスケットボール競技における
選手評価の検討

—指導者と選手の評価の差に着目して—

石 川 峻
青 木 敦 英

《研究ノート》

大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討

—指導者と選手の評価の差に着目して—

石 川 峻
青 木 敦 英

1. 緒言

バスケットボールは1892年アメリカにて、ジェイムズ・ネイスミスによって考案された。現在の国際バスケットボール連盟（FIBA）への加盟国は213ヶ国であり（FIBA, online），世界中で愛されているスポーツである。バスケットボールのゲームは、2チームによってプレーされ、それぞれのチームが「相手チームのバスケットに得点すること」および「相手チームが得点することを妨げること」を目的とし、ゲームの勝敗は、「競技時間が終了した時点で得点の多いチームを勝ちとする」と規定されている（日本バスケットボール協会, online）。ゲームで勝利するためには競技力を高める必要があるが、バスケットボールの競技力は様々な要素から構成されている。パス、ドリブル、ショットといったスキル、それらを状況によってどのように用いるかといった判断力、速く走る、高く飛ぶといった運動能力、相手に立ち向かう強い気持ちや、最後まで諦めないといったメンタルなど、枚挙にいとまがない。これらの競技力を高めるためには、指導者（監督ならびにコーチ）はまず各選手の長所や短所を適確に評価しなければならない（ジアニーニ, 2012；松岡ほか, 2019）。また、各チームにはそれぞれのチームスタイルが存在するが、チームスタイルの決定や練習計画を立てることにしても選手の長所や短所を評価し、把握することが重要である（倉石, 2005；日本バスケットボール協会, 2014）。

ところで、指導者は試合前に選手の競技力を見極めて、試合に参加させる選手を選択していくことが求められるとともに、試合中のコーチングの重要要素の1つとして選手交代があり、どのタイミングでどの選手と交代をさせるのか様々な選択をしなければならない（安保, 2019）。そして、チームを構成するにあたり、選手選択のコンセプトは、チームの戦略や指導者の考えに則った戦術を遂行できる、競技力の高い選手を選ぶことが重要である。試合に登録する際の人数制限がある中で、各ポジションにどのような選手を何人配分するかなど、選手選択のための評価項目や基準は指導者の考えに依存する（安保, 2019）。しかし、これまでの多くの指導者においては、指導者自身の経験を中心として選手の能力が評価されている場合が多く、言い換えると、選手選考やプレイタイムには、指導者の主観的な評価が大きな影響を与えているという現実がある（松岡ほか, 2019）との指摘もある。また、指導者の選手評価と選手の自己評価が乖離していることも考えられる。

そこで本研究では、A大学男子バスケットボール部の選手と指導者を対象に、スキル面とパーソナリティ面における選手に対する指導者による評価と選手の自己評価の差を明らかにし、今後のチームビルディングの方策を検討することを目的とする。

2. 研究方法

2.1 研究対象

対象者は関西学生バスケットボール連盟 2 部に所属している A 大学男子バスケットボール部の選手 24 名、同部の指導者である筆頭執筆者（コーチ歴 6 年、日本バスケットボール協会公認 B 級コーチライセンス保持、日本バスケットボール学会会員）である。選手の基本特性は表 1 に示した。対象者の選手には口頭と書面にて研究の趣旨や、データ提供の有無が練習や試合での不利益（メンバー選考等）に繋がることのないことを説明し、対象とした全選手の承諾を得た。

表 1 研究対象者の基本特性（選手）

ポジション	身長		体重		競技歴	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
Guard (n=6)	168.83	5.60	64.33	9.61	10.00	2.28
Wing (n=8)	175.75	4.10	69.25	5.99	10.00	2.33
Bigman (n=10)	182.50	8.59	79.20	7.60	9.60	2.55
全体 (n=24)	176.83	8.48	72.17	9.70	9.83	2.32

2.2 研究方法

24 名の選手は 2020 年 11 月 6 日～2020 年 11 月 30 日までに 1 人 20 分程度の指導者との 1 対 1 の面談を実施した。その面談の冒頭 5 分程度で、Google Forms を用いてカイパー (2020) を参考に作成したスキル面 20 項目とパーソナリティ面 20 項目について、自身の能力を 1～5 点（1 が最も低く、5 が最も高い）で回答させた。回答する際は、自分の力についてありのままの姿を見つめ、100%正直に回答するように指示した。また、指導者の評価は、選手の評価のバイアスを受けないように配慮し、選手との面談前の 2020 年 11 月 3 日に実施した。

2.3 統計処理

A 大学ではポジションを「Guard」、「Wing」、「Bigman」と 3 つに明確に分けている。ポジションによって、求められる役割も異なるので、スキル面においてはポジションごとの分析も行った。指導者と選手の評価の差については統計処理ソフト IBM SPSS Statistics 27.0 を用いて対応のある 2 群の母平均の差の検定 (t 検定) を行った。本研究の統計的有意水準は全て 5%未満とした。さらに、サンプルサイズによって左右されない標準化した指標である効果量を算出した。効果量の算出には r を使い、0.1 以上 0.3 未満を効果量小、0.3 以上 0.5 未満を効果量中、0.5 以上を効果量大として評価した（水本・竹内，2008）。

3. 結果

表2に選手全体のスキル面の評価を示した。「シューター」、「ファストブレイク的能力」、「ポストへのパス」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には1%水準で有意な差（効果量大）が認められ、いずれも選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。また、「パッサー」、「創造性」、「ディフェンスリバウンド」、「フリースロー」、「ハーフコートオフENSEの遂行力」、「オンボールディフェンス」、「オフボールディフェンス」、「スリーポイント」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には5%水準で有意な差（効果量中または大）が認められ、いずれも選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。

表3に各ポジションにおけるスキル面の評価について、有意な差のある項目のみを示した。Guardでは「シューター」、「ディフェンスリバウンド」、「スリーポイント」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には5%水準で有意な差（効果量大）が認められ、いずれも選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。Wingでは「オフENSEリバウンド」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には5%水準で有意な差（効果量大）が認められ、選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。Bigmanでは「パッサー」、「シューター」、「ボールハンドラー」、「フリースロー」、「オンボールディフェンス」、「ポストへのパス」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には1%水準で有意な差（効果量大）が認められ、いずれも選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。

表4に選手全体のパーソナリティ面の評価を示した。「誰かのリーダーシップについていくタイプか」、「用心深いか」、「度胸があるか」、「自制心があるか」、「忍耐力があるか」、「発言力があるか」、「前向きか」、「感情的か」、「熱くなるか」、「チームの一員であることを楽しんでいるか」、「がむしゃらに頑張るか」、「バスケットボールに重きを置いているか」、「勝つことに重きを置いているか」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には1%水準で有意な差（効果量大）が認められ、いずれも選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。また、「社会的か」、「自発的か」において、指導者による評価と選手の自己評価の間には5%水準で有意な差（効果量中）が認められ、いずれも選手の自己評価が指導者よりも高くなっていた。

表2 選手全体のスキル面の評価

項目	指導者		選手		t (23)	p	ES
	平均値	SD	平均値	SD			
パスサー ¹⁾	2.54	0.88	3.00	0.72	2.20	0.038	0.42
シューター ²⁾	2.63	1.13	3.33	0.76	3.21	0.004	0.56
ボールハンドラー ³⁾	2.50	1.06	2.88	0.61	1.81	0.083	0.35
創造性	2.71	0.75	3.29	0.95	2.81	0.010	0.51
1 on 1 の能力	2.96	0.69	3.25	1.03	1.32	0.200	0.27
ファストブレイク ⁴⁾ の能力	2.79	0.59	3.25	0.74	2.88	0.008	0.52
敏捷性	3.13	0.74	3.21	0.83	0.46	0.647	0.10
ポストアップ ⁵⁾	2.63	1.13	2.63	1.06	0.00	1.000	0.00
オフェンスリバウンド ⁶⁾	2.63	1.24	2.83	1.09	1.31	0.203	0.26
ディフェンスリバウンド ⁷⁾	2.46	1.02	2.92	1.06	2.70	0.013	0.49
フリースロー	3.00	0.66	3.46	0.78	2.54	0.018	0.47
ハーフコートオフェンスの遂行力	3.13	0.80	3.50	0.59	2.10	0.047	0.40
スクリーン ⁸⁾	2.75	0.68	3.00	1.10	1.03	0.314	0.21
オンボールディフェンス	2.88	0.74	3.42	0.65	2.50	0.020	0.46
オフボールディフェンス	2.75	0.44	3.17	0.92	2.10	0.047	0.40
バスケットボール IQ	2.88	0.80	3.00	1.10	0.55	0.588	0.11
スリーポイント	2.83	1.13	3.21	1.18	2.10	0.047	0.40
オフボール ⁹⁾ のプレー	2.83	0.56	3.04	0.81	1.16	0.260	0.23
ポストへのパス	2.63	0.71	3.38	0.92	3.00	0.006	0.53
ブロックショット ¹⁰⁾	2.13	0.95	2.33	1.09	1.10	0.285	0.22

表3 各ポジションにおけるスキル面の評価

ポジション	項目	指導者		選手		t	p	ES
		平均値	SD	平均値	SD			
Guard	シューター	2.50	0.55	3.50	0.55	3.87	0.012	0.87
	ディフェンスリバウンド	1.50	0.84	2.33	0.82	2.71	0.042	0.77
	スリーポイント	2.83	0.41	3.83	0.75	3.87	0.012	0.87
Wing	オフェンスリバウンド	2.00	0.53	2.50	0.53	2.65	0.033	0.71
Bigman	パスサー	1.70	0.48	2.90	0.57	4.81	0.001	0.85
	シューター	1.80	0.92	3.20	0.63	5.25	0.001	0.87
	ボールハンドラー	1.50	0.53	2.70	0.48	6.00	0.000	0.89
	フリースロー	2.50	0.53	3.50	0.85	3.87	0.004	0.79
	オンボールディフェンス	2.40	0.52	3.50	0.85	3.50	0.007	0.76
	ポストへのパス	2.00	0.47	3.40	0.84	4.12	0.003	0.81

表4 選手全体のパーソナリティ面の評価

項目	指導者		選手		t (23)	p	ES
	平均値	SD	平均値	SD			
誰かのリーダーシップについていくタイプか	3.46	0.66	4.21	0.78	3.71	0.001	0.61
リーダー役か	2.33	0.87	2.63	1.17	1.10	0.284	0.22
社会的か	2.83	0.70	3.42	0.93	2.51	0.020	0.46
用心深いか	3.04	0.55	3.88	1.03	4.05	0.000	0.65
度胸があるか	3.04	0.75	3.75	0.99	4.04	0.001	0.64
自制心があるか	3.17	0.70	3.88	0.80	3.47	0.002	0.59
忍耐力があるか	3.21	0.72	3.92	1.10	3.47	0.002	0.59
発言力があるか	2.21	0.51	3.29	1.20	3.94	0.001	0.63
前向きか	3.00	0.51	4.13	0.90	6.91	0.000	0.82
感情的か	2.38	0.65	3.33	1.13	4.92	0.000	0.72
自発的か	2.79	0.59	3.25	0.90	2.30	0.031	0.43
タフネス	3.17	0.70	3.21	0.93	0.17	0.866	0.04
言葉が少ないか	3.21	0.78	2.88	1.26	-1.36	0.188	0.27
熱くなるか	2.75	0.68	3.54	1.14	3.10	0.005	0.54
チームの一員であることを楽しんでいるか	3.21	0.51	4.71	0.62	9.42	0.000	0.89
がむしゃらに頑張るか	3.54	0.93	4.21	0.83	3.00	0.006	0.53
すぐ弱気になるか	2.50	0.72	2.50	1.14	0.00	1.000	0.00
バスケットボールに重きを置いているか	3.29	0.75	4.50	0.59	7.60	0.000	0.85
勝つことに重きを置いているか	3.13	0.68	4.63	0.58	11.14	0.000	0.92
自分に自信があるか	3.21	0.72	3.54	1.14	1.50	0.148	0.30

4. 考察

本研究の目的は、大学バスケットボール選手のスキル面とパーソナリティ面における選手に対する指導者による評価と、選手の自己評価の差を明らかにし、今後のチームビルディングの方策を検討することである。結果を踏まえて、考えられる今後のチームビルディングの方策について述べていく。

4.1 スキル面における方策

スキル面において、全体では20項目中11項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差があった。パスやショットといった個人スキルである「パスサー」、「シューター」、「フリースロー」、「スリーポイント」、「ポストへのパス」の項目に差があり、これらにおいて指導者が評価している以上に選手は自信を持つ

ていることが分かった。また、「オンボールディフェンス」、「オフボールディフェンス」といったディフェンスに関する項目でも有意な差がみられた。ディフェンスは数値に表れにくく、評価が難しいと考えられる。ポジション別にみると、Guard では 20 項目中 3 項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差があった。「シューター」、「スリーポイント」というアウトサイドショットに関する項目に差があり、指導者が評価している以上に選手はアウトサイドショットに自信を持っていることが分かった。Wing では 20 項目中 1 項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差があった。Wing においては他のポジションより有意な差がある項目が少なく「オフェンスリバウンド」のみであった。Wing の選手は、指導者による評価と自己評価がある程度は一致していると考えられる。Bigman では 20 項目中 6 項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差があり、全ポジションの中で 1 番多かった。また、他のポジションが 5% 水準で差があったのに対して、Bigman では 1% 水準で有意な差があった。「パッサー」、「シューター」、「ボールハンドラー」、「フリースロー」、「ポストへのパス」という項目において差があり、パスやショットといった個人スキルに関する項目で、指導者が評価している以上に選手は自信を持っていることが分かった。

スキル面での指導者による評価と選手の自己評価の差を埋めるために、2 つの方策が考えられる。1 つ目は、ショットやリバウンド等のゲーム中の本数や確率を算出できる項目に関しては、過去の数値や目標とする数値を明確に提示することである。ジアニーニ (2012) は「時に選手は自らの技術レベルや力量についてわかっていないことがある」と指摘している。また、続けて「このことは、多くの選手が打ちたがる人気のスリーポイントシュートにおいて特に顕著である」と述べている。このようなことは、自分の能力やこれまでの数値を理解しておらず、間違った自信を持っていることが原因であると考えられる。過去の数値を理解させた上で、目標とする数値を提示し、足りていないことを認識させることで、自らが求められる役割を受け入れると共に、目標値の達成へ向けて意欲的に取り組める可能性がある。また、各ポジションや各選手に求める数値を明確に提示することにより、評価がしやすくなると考えられる。2 つ目は VTR を用いてできていない場面を指導者と選手と一緒に確認することである。パスやディフェンス等、数値に表すことが難しい項目について有効だと考えられる。選手のもつイメージは内的イメージで、指導者のもつイメージは外的イメージであるのでズレが生じてしまう (高畑, 2006)。練習やゲームにおいて、できていない場面を VTR で確認し、できている選手 (求めている基準) と比較させたりすることにより、選手とのズレを解消できる可能性がある。

4.2 パーソナリティ面における方策

パーソナリティ面において、20 項目中 15 項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差がみられ、スキル面以上に評価に明らかな差があった。パーソナリティ面は「内に秘めた思い」や「内に秘めた強さ」等の表現が使われるよう、表面上には見えにくい部分もあり、評価が難しい。しかし、指導者は選手の性格を理解した上での指導が必要である (高畑, 2007 ; 田渡, 2012)。

パーソナリティ面での指導者による評価と選手の自己評価の差を埋める、つまり、選手のパーソナリティ面を指導者がより理解するために、3 つの方策が考えられる。1 つ目は選手との会話を増やすことである。田渡 (2012) は「はじめは自分から話しかけ、なるべく早く、話しやすい監督やコーチになることが大切であり、そうすることで選手たちも自分の意見や考えを言うようになる。」と述べており、まずは指導者自らが会話を増やす姿勢が必要である。また、定期的に 1 人 1 人との個人面談を実施することにより、選手が自分の思いを話せる環境を作ること重要であると考えられる。2 つ目は学生スタッフやトレーナー、他の教職員との連携を密にし、情報交換を積極的に行うことである。指導者以外の人間に、指導者には言い

くいことを話している可能性がある。また、授業や日常生活など、バスケットボールの活動中では見られない態度等を知ることによって選手への理解が深まる可能性もある。3つ目はバスケットボール以外の活動を行うことである。例えば、オフシーズンでのレクリエーションやクロストレーニングとしてバスケットボール以外のスポーツを実施することや、BBQなどのイベント等である。福富（2015）はチーム作りにおいて、「たくさんの物差しで評価すると、人間的に尊敬できる部分にたくさん出会える」と述べている。他のスポーツや活動を行うことで普段のバスケットボールの練習中では見られない様子を見ることが出来る。また、バスケットボールの練習中とは異なる選手がリーダーシップをとる場面もあるかもしれない。このような方策を通して、選手のパーソナリティ面の理解に繋がる可能性があると考えられる。

5. まとめ

5.1 摘要

本研究を通して以下の2点が明らかになった。

- 1) スキル面において、全体は20項目中11項目、ポジション別にみると Guard は3項目、Wing は1項目、Bigman は6項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差があった。
- 2) パーソナリティ面において、20項目中15項目で指導者による評価と選手の自己評価には有意な差があった。

以上のことから、今後のチームビルディングの方策として、スキル面ではこれまでの数値と目標とする数値を明確に提示すること、VTRを用いてできていない場면을指導者と選手が一緒に確認し、戦術や指導者の考えを共有することを提案した。パーソナリティ面では、選手との会話を増やすこと、学生スタッフやトレーナー、他の教職員との連携を密にし、情報交換を積極的に行うこと、バスケットボール以外の活動を行うことを提案した。

5.2 今後の課題

本研究では、スキル面とパーソナリティ面の2面から選手の評価を行ったが、近年では「ライフスキル」といわれるスポーツを通じた人間形成、すなわち「人としての成長」が競技力と関連していることが報告されている（島本ほか、2013）。今後、このようなスポーツを通じた人間性や社会性の評価についても実施し、より多角的に選手を評価することでより一層のチーム力の向上につながることを期待できると考えられる。

注釈

- 1) パスを出すことが上手い選手.
- 2) ゴールから離れたエリア辺りからのショットを得意とする選手.
- 3) ボールの扱い方が上手い選手.
- 4) チームがボールを保持した瞬間, 得点を追求する速い攻撃.
- 5) ゴール付近でゴールやディフェンスを背にしてパスを受けられる位置と姿勢をとること, またそこからのプレイ.
- 6) オフェンス時に自チームのショットが成功せず, リングやバックボードに当たって跳ね返ったボールを獲得するプレイ.
- 7) ディフェンス時に相手チームのショットが成功せず, リングやバックボードに当たって跳ね返ったボールを獲得するプレイ.
- 8) オフェンスの選手が, 他のオフェンスの選手をマークするディフェンスの選手の進路に位置を占めて壁を作るプレイ.
- 9) オフェンス時において, 選手がボールを持っていない状態のこと.
- 10) 相手の選手がショットしようとしている, もしくはショットしたボールにディフェンスの選手が触れるプレイ
※一部, 小野・小谷 (2017) を参考.

文献

- 1) 安保澄 (2019) チームパフォーマンス最大化のための選手の選択と交代. 日本コーチング学会編, 球技のコーチング学. 大修館書店: 東京, pp. 274-284.
- 2) デニー・カイパー: 篠原美穂訳 (2020) コーチとは自分を知ることから始まる. ベースボール・マガジン社: 東京, pp. 244-253.
- 3) FIBA (online) ABOUT US . <http://www.fiba.basketball/>, (参照日: 2020年11月20日).
- 4) 福富信也 (2015) 「勝つ組織」: 集団スポーツの理論から学ぶビジネスチームビルディング. カンゼン: 東京, pp. 102-105.
- 5) ジョン・ジアニーニ: 石村宇佐一・鈴木壯訳 (2012) バスケットボールの“コートセンス”: メンタルゲームを勝ち抜くために. 大修館書店: 東京, pp. 11-36.
- 6) ケン・スウォルギン: 水谷豊ほか訳 (1997) バスケットボールの評価システム. ジェリー・クロウゼ編, バスケットボール コーチング・バイブル. 大修館書店: 東京, pp. 77-80.
- 7) 倉石平 (2005) バスケットボールのコーチを始めるために. 日本文化出版: 東京, pp. 130-132.
- 8) 松岡篤史・小原侑己・甲斐智大・三浦健・木葉一総・高井洋平・山本正嘉 (2019) 大学男子バスケットボール選手の基礎体力・技術, 競技体力・技術, および実際の競技パフォーマンスを包括的に評価してフィードバックする試み. スポーツトレーニング科学, 20: 1-10.
- 9) 水本篤・竹内理 (2008) 研究論文における効果量の報告のためにー基礎的概念と注意点ー. 英語教育研究, 31: 57-66.
- 10) 日本バスケットボール協会 (online) 2020 バスケットボール競技規則. http://www.japanbasketball.jp/files/referee/rule/2020_rule_0616.pdf, (参照日: 2020年11月20日).
- 11) 日本バスケットボール協会 (2014) バスケットボール指導教本 改訂版上巻. 大修館書店: 東京, pp. 12-18.
- 12) 小野秀二・小谷究監 (2017) バスケットボール用語辞典. 廣済堂出版: 東京.
- 13) 島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信 (2013) アスリートに求められるライフスキルの評価ー大学生アスリートを対象とした尺度開発ー. スポーツ心理学研究, 40: 13-30.
- 14) 高畑好秀 (2006) その気にさせる! コーチング術: 速効テクニック編. 山海堂: 東京, pp. 108-110.
- 15) 高畑好秀 (2007) 結果が出せる! コーチングのき・ほ・ん. 山海堂: 東京, pp. 36-37.
- 16) 田渡優 (2012) バスケットボール 監督・コーチ入門. 池田書店: 東京, pp. 42-52.